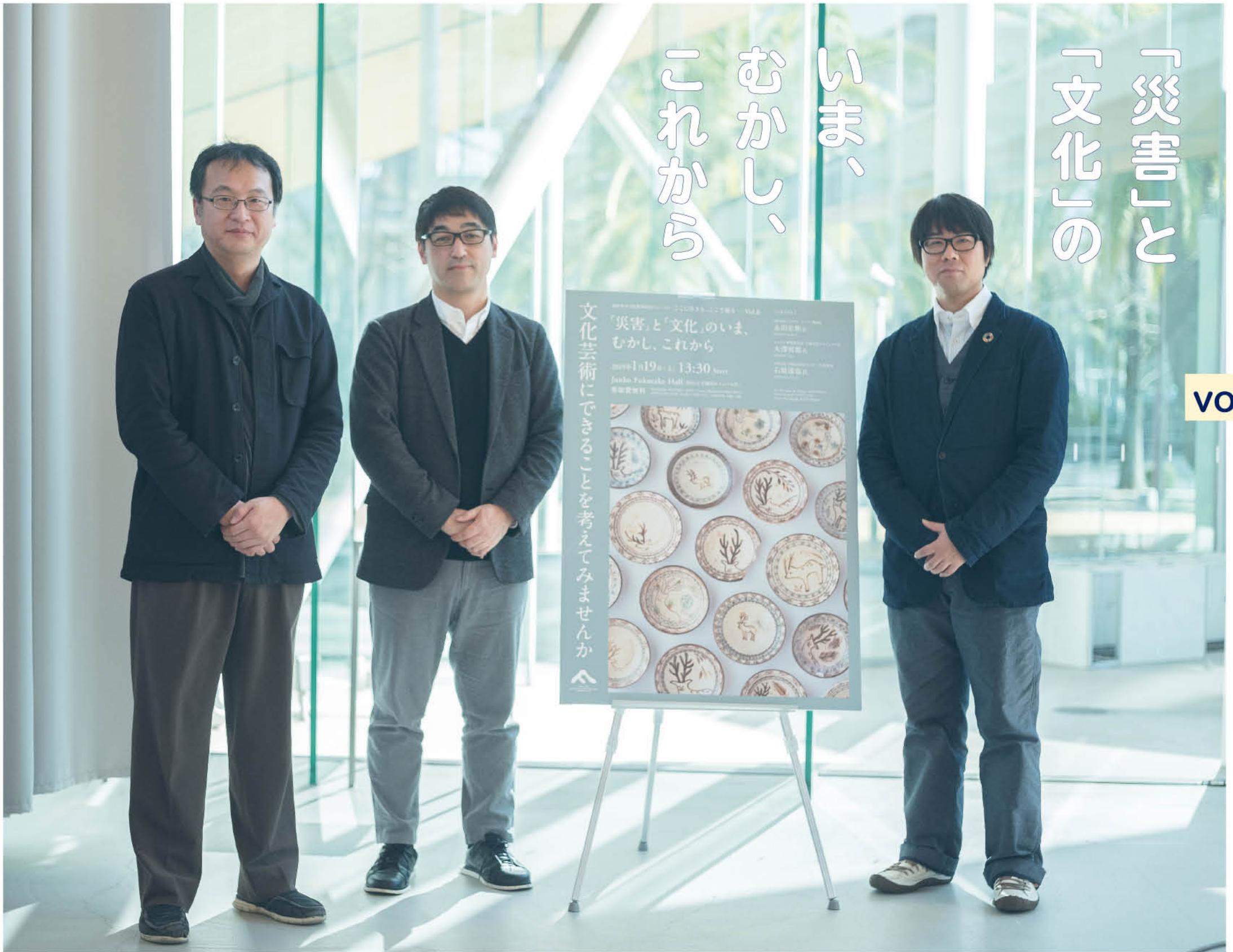


FUEKI

vol.69





左から 大澤寅雄さん 永田宏和さん 石原達也さん

2018年7月に西日本を襲った豪雨。岡山県内でも真備町をはじめ多くの地域が被災し、復旧作業は今も続いている。

第8回は、「災害」と「文化」の「いま、むかし、これから」をテーマに永田宏和さん、大澤寅雄さん、石原達也さんに災害とアートのかかわりや、その周囲の人々の心の動き、日本文化を背景とした防災に対する考え方など幅広く語り合っていただきました。

(2019年1月19日 Junko Fukutake Hall)

※テークセッション全文は財団公式WEBサイト「財団と人に掲載中」

－日本には防災の文化があるのか

大澤 文化をどうとらえるか、人によって違うと思いますが、大きくとらえると、文化の中に地域の祭りや芸能、歴史なども含まれると思っています。歴史を遡ると、祇園祭りというのは、菅原道真の怨霊と、実際に発生した災害が結びついて、いまだに祭りが続いている。災害民話、災害伝承は全国各地にあって、オープニングの備中温羅太鼓の演奏も、桃太郎と鬼の伝説に由来した内容で、もしかするとその背景には災害があったとしてもおかしくないと思いした。

民話や文化財、祭祀、祭礼などには、災害、天災が背景にあって、そういうものと切り離せないものだと私は思っています。それを伝えていくメディアの役割、例えば津波に襲われた地域には「ここまで波が届いた」という石碑が建つてたり、石が昔から置かれてあつたり、そういうのも文化でもあると思います。

だから文化と災害というのは全然遠い存在ではなくて、文化の背景には災害というものが、きっと探しせばたどり着くのではないかと思いま

す。

永田 昔の人は、田畠を耕したり、漁師だつ

たり、災害や自然を普段から意識していないといけないというのが、日常の暮らしの背景にあったように思います。現代の人は、災害や防災について、怖いので敢えて何も考えないようにするところがあるようになります。そうではなくて、自然や災害との「付き合い方」の問題だと思うので、「付き合い方」のいろんなインターフェースを私たちが作つていけたらいいなと思っています。

「〇災」という言葉にかかるとしたら

－防災という言葉を

石原 避難所で200人一ヶ月間暮らすことになつたらどうなるかということを考えるとき、単純に男女と分けるだけでいいのか、年齢的にも配慮が必要だろうし、子どもでも障害があつたらどうするのか、そういうことを理解してしつかり考える力を付けていく必要性を感じています。みんなで話し合つて、みんなで決めるトレーニングをもっとやらないといけないと思っていて、それを防災とは違う言い方として、ぜひ岡山の皆さんに教えていただきたいなど。

大澤 「〇災」とすることに関しては、聞いたことのあるのは「減災」という言い方。災害を



●永田宏和 NAGATA Hirokazu

NPO法人プラス・アーツ 理事長
株式会社iop都市文化創造研究所代表
デザイン・クリエイティブセンター神戸
副センター長

1993年大阪大学大学院修了。2005年ファミリーが楽しく防災を学ぶプログラム「イザ！カエルキャラバン！」を開発。2006年NPO法人プラス・アーツを設立し、理事長に就任。現在、全国各地及び、中国、東南アジア、中南米など海外での防災教育普及に積極的に取り組む。東京ガス、東京メトロ、三井不動産グループ、無印良品、NHKなど企業・メディアが展開する防災啓発プロジェクトのアドバイザーも数多く務める。『第6回21世紀のまちづくり賞・社会活動賞』受賞、『第1回まちづくり法人国土交通大臣賞【まちの安全・快適化部門】』受賞。国際交流基金『地球市民賞』受賞。TBS「情熱大陸」、日本テレビ「世界一受けたい授業」などテレビ番組にも多数出演。
<http://plus-arts.net/>

●大澤寅雄 OHSAWA Torao

ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室／文化生態観察
NPO法人アートNPOリンク理事
NPO法人STスポット横浜監事

1970年、滋賀県生まれ。1994年、慶應義塾大学卒業後、劇場コンサルタントとして公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年、文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事および事務局長、玉川大学および跡見学園女子大学の非常勤講師（文化政策論、アートマネジメント等）、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員を経て現職。2010年からパートナーであるダンサー・振付家の手塚夏子とともに、日本やアジア各地の民俗芸能をリサーチする「Asia Interactive Research」を展開。2013年、神奈川県相模原市から福岡県糸島市に移住し、地域文化を生態系として観察する「文化生態観察」を実践中。



防ぐのは難しいが、減らすことはできるのではないか、という考え方。

僕は、災い転じて福となることがある、「災福」という言葉がいいなど思って聞いていました。「災」だけが終わらない、終わらせない。そのあとにきっと「福」がある。

永田 重要なのは、「防災」と謳っていても、取り組んでいる私たちは「減災」なんだという意識を持ち続けていて、つまるところ災害は人間の力で完全に防ぐことはできないと思つてやっています。

一 参加者のみなさんへメッセージを

大澤 フランスの社会学者ピエール・ブルデューは、資本には、経済資本、文化資本、社会関係資本の3つがあると言っています。文化と社会関係資本は非常に近く、3つの資本は連関して相互に転換していると思います。災害があった時に社会関係資本というのは、危機も訪れます。逆に新しく外からの社会関係というネットワークが一気に生まれます。石原さんのような方がいると、一気に社会関係資本は増える可能性があると思います。ぜひ伝え続けてほしいです。忘れた

いと思う方も多いでしょうけれども、後世に伝えていくようにしていただき、岡山が

「災い転じて福となる」ことを祈っています。

永田 私が副センター長を務めている「デザイン・クリエイティブセンター神戸（X21O）」分野の課題に対しても「クリエイティブ」な考え方を持つて、取り組んでいただければと思います。

石原 第一回の災害ネットワークおかげ（注1）の会議を開いた時に、たくさんの方が来てくれて、すごく感動しました。岡山は今まで災害が少なくて、助け合いがなくて、防災訓練に人が来ないし、もし岡山で災害があつたら大変だよと、さんざん他県の方に言われてきたのですが、それが実際起きてどうにかしようとかんばった岡山の人々に誇りを持っています。普段のことにつながつていい機会になればいいなと思いますし、今回は多少つなぎ役をしてきましたが、みながつなぎ役になつていければいいなと思います。

注1 岡山県内で災害支援に取り組む組織のネットワーク



●石原達也 ISHIHARA Tatsuya
NPO 法人岡山 NPO センター 代表理事

1977年岡山市生まれ。2001年大学生のみのNPO法人設立に参画したことからNPO業界に。活動を続ける中で支援者を志すようになり2003年鳥取市社会福祉協議会に入職。Vコーディネーターを務めた後に転職し、出身地・岡山でNPO法人岡山NPOセンター事務局長に就任（現在、代表理事）。その他、NPO法人みんなの集落研究所（代表執行役）、公益財団法人みんなでつくる財団おかげ（理事）、一般社団法人全国コミュニティ財団協会（常務理事／事務局長）等の設立に関わる。平成30年7月豪雨にあたり、7月7日に災害支援ネットワークおかげというネットワークを立ち上げ、県内のNPO、企業、大学、専門家など様々な民間組織の連携により支援を展開している。
<http://www.npokayama.org/>



今回のフォーラムでは、被災地支援の活動に取り組んでいる団体の紹介、

ご協力いただいたみなさまの紹介、

そして交流会は全員で「DAGASHIで笑顔で交流」をしました。



フォーラムには、
様々な被災地支援活動助成を活用し、
被災地の教育文化の
復興に取り組んだ団体のみなさまも参加。



左から 被災地支援団体(SOSU)、フードコーディネーターの灰原抄織さん、
日本一の駄菓子売場から秋山秀行さん、ボランティアスタッフの#おかやまJKnote

団体名	活動内容
SOSU	被災親子に寄り添う、音楽と学びのサロン作り
やかげ小中高こども連合YKG60	小田川流域に住む小中高生の学習・生活支援
くすのきマルシェ実行委員会	商いをチカラに!倉敷市内高校生協働企画くすのきマルシェの開催
アリスの会	被災地域の保護者支援プロジェクト「ペアレント・プログラム」の実施
特定非営利活動法人だっぴ	被災した子ども達への支援情報の集約と発信事業
#おかやまJKnote	高校生目線で被災地や支援者の声を届ける新聞マビペーパーの発行
株式会社ベネッセホールディングス	文房具や教具の提供、学習支援指導、しまじろうショーの開催等



総社市を拠点に活動する備中温羅太鼓の演奏でスタート



被災地支援団体(左から やかげ小中高YKG60、くすのきマルシェ、
アリスの会、だっぴ、#おかやまJKnote、ベネッセホールディングス)



左から 引き両紋の青山雅史さん、ようびの山口祐史さん、陶芸家の原在加さん



「引き両紋」の青山雅史さんは、「岡山県産のお茶が岡山県内で消費される文化へ」をテーマに活動。瀬戸内茶は岡山県内のみで販売されています。
「ようび」の山口祐史さんは、「やがて風景になるものづくり」をテーマに西粟倉村で家具や暮らしの道具をつくっています。
陶芸家の原在加さんには、フォーラムのカバーアートワークに協力いただきました。昨年7月の豪雨災害で、実家でもある真備のアトリエが被災。チラシの写真は被害で残った作品の一部です。

マツウラ理事長がゆく! 子ども×アート

このコーナーでは美術教育の最前線で活躍するキーパーソンに、最新動向と今後の展開をインタビューしていきます。トップバッターは中学校新学習指導要領改訂にも携わられた村上尚徳氏。これからの中学校の美術教育についてお話を伺いました。

村上先生に聞く美術教育



村上尚徳
(むらかみ・ひさのり)
IPU・環太平洋大学
副学長(教育)

1962年愛媛県生まれ。1985年に岡山大学卒業後、岡山市公立中学校美術教員として赴任。その後、岡山県教育庁指導課指導主事として教育行政に携わる。2003年から国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官に採用され、全国を回り美術教育の啓発に努める。2011年から岡山に戻り環太平洋大学に勤務し、2017年より副学長。この間、学習指導要領の改訂には、2008年は中学校及び高等学校美術の文部科学省担当官として、1998年は小学校国画工作科、2016年は中学校美術科の改訂協力者として関わる。

ゲスト：IPU・環太平洋大学 副学長(教育)・村上尚徳氏
聞き手：公益財団法人福武教育文化振興財団・松浦俊明理事長



きましたが、8割ぐらいの先生の評価は一致していました。さらに話し合いをすることによって、一致率が上がりました。その時に大事なのは、生徒にコメントを書かせるということです。絵を見ただけではよくわからないけど、その子の思いを言葉で補つてあげると、多くの人が理解してくれて、これもすごいなと絵の良さがわかります。

松浦 成長したときにどんな変化が期待されますか？

村上 子どもが育っていく中で、確かに美術教育というのも一つの要素ですが、それ以外にも様々な要素があるので、検証することは難しいです。ただ、日本のアニメなどサブカルチャー的なものが世界的に認められていたり、どんな小さな町に行つても、それなりに洗練された建物やデザインされたものがある背景を考えると、全員に必修教科として図工や美術教育をやってきた——そういう土壤がある成果だと思います。

松浦 小学校で身につけておいてほしい土台などはありますか？

村上 造形遊び的なところで材料感覚をしつかり豊かにしておくこと。児は、砂場で山をつくって固めてトンネルを掘つたら穴が開くということ

が新鮮で夢中になります。粘土を持って指でぐつと押さえたら、指の型がつくというのが新鮮なんです。そういうふうにしながら、粘土というのは何だろうと、確認作業をしていきます。幼児から小学校の低学年くらいまでは特に確認作業が本能的に子どものなかで起こっていて、それが一つの重要な造形活動のきっかけになっています。

材料体験を豊かにしておくと、これはこんなところに使える、あんなところに使えると引き出しが増え、一つの材料を使っていろんな発想が生まれてきます。

松浦 幼児のうちに五感をつかって身の回りの世界を確認することが大切なのですね。文化に関わりながら心豊かな生活をしていくことができるような子どもを育てる教育に重点を置いています。朝、目を開けて夜寝るまで、目の前は造形だらけです。造形的な視点を豊かに持たせることによって、感じ取る力が豊かになつて、感性が育つります。

最後に、これからの中学校の美術教育はどう変わっていくのでしょうか？

村上 小学校は2020年から中学校になりますが、そこでは学びに向かう力と思考力、判断力、表現力。それと知識及び技能というふうに学習の目標が3つに分かれ、評価もその観点で行われます。知識や技能だけじゃなくて、思考力、判断力、表現力と

いう、図工でいうと、発想・構想とか、鑑賞して作品を見て考える力をしっかりと育てましょう」ということが重視されてきています。ただ単に上手な絵を描かせるとか、上手な作品をつくらせるのが目的じやなくて、描くことを通してつくることを通して、どんな資質・能力を育てていくか、そのあたりが造形教育では大事だと思います。

松浦 以前、中学生が描いた、同じテーマ、同じ題材のいろんな絵を岡山県の先生70人ぐらいに発想・構想の評価点をつけていただき

※全文はWEB「財団と人」に6月掲載予定



Re-discover Tsuyama



設立
2017年
主な活動場所
津山市
<https://www.facebook.com/RDTsuyama/>

和田優輝さん・チャールズ裕美さん

2018年度の「インバウンド向け文化体験マップ作りによる津山の再発見と魅力化」の成果を基に、①後継者不足に悩む工房に1週間ほど弟子入りし、ものづくりを体験してもらう「体験し伝えるDESHIプロジェクト」②掘り起こした地域資源を英語でガイドできる人材を育てる「伝えられるガイド育成事業導入編」③これまでの成果を報告するフォーラムの開催に取り組みます。



岡山高等学院
特定非営利活動法人

不登校・ひきこもり当事者を対象に「合同作品製作会」を月1回行い、12月には作品を集めて展覧会を開催します。学校生活や社会生活で孤立感を持つ子どもや若者が、年齢や立場の関係なく美術体験を共有することで、自分を受け入れてくれる居場所を確保することができると共に、自分自身を開示するきっかけとなります。

設立
2017年
主な活動場所
岡山県内
<http://o-h-gakuin.info/>

木村浩輔さん

地域課題の解決に取り組む方々を応援する「福武教育文化活動助成」。今年度の助成対象に決定した134団体・個人（助成総額2,800万円）の教育文化活動のうち、3ヵ年継続して助成する団体の活動をご紹介します。

応援します！

やかげ小中校こども連合YKG60



設立
2014年
主な活動場所
矢掛町
<https://www.facebook.com/YKG60>

室貴由輝さん・井辻美緒さん

心のケアと居場所作り みんなの夢が叶う基地（みんきち）の活動。月曜日から金曜日までの15:30～19:30に出現する「みんきちハウス」。こどもたちが自由にのんびり、ゆっくり楽しく過ごせる場所を開設。何気ない交流や会話から夢が生まれてカタチになっていく、おとなたちはそのお手伝いをします。



高校生地域ふくし実行委員会

岡山県内で福祉を学ぶ高校生の学習成果発表の場、地域福祉について高校生と住民が語り合う場づくり。6月に介護技術コンテスト、12月に生徒体験発表会を実施。どちらも生徒の運営で会を実施します。12月は、民生委員やふれあい・いきいきサロンを運営する地域の方々とグループワークを行いながらサロンの意義や活動内容を理解し、今後の課題を検討します。

設立
2018年
主な活動場所
岡山県内

生徒実行委員会メンバー
(倉敷市立倉敷翔南高校)



FACE

nawateアーカイブ 代表
成田 海波さん

時代との接点をつくつてくれる 8ミリフィルムが知らない

家庭に眠る8ミリフィルムの保存と活用を通じて地域のアーカイブをつくる「nawateアーカイブ」は、収集したフィルムをデジタル化して、映像鑑賞会をひらくプロジェクト。奉還町を拠点に始めたこの活動について代表の成田海波さんにお話を伺いました。

活動を始めたきっかけ

8ミリフィルムを集めて上映するという活動をしていた方と大学時代に知り合い、手伝ってと誘われたのがきっかけ。いままで自分が知らなかつた地域の風習や文化、生活の様子

がそこにある興味深かつたし、活動のひろがりを近くで体

8ミリフィルムの魅力は?

鑑賞会では来場者の方が「ちょっと止めて」といきなり映像の本筋とは異なる、そこに写っている物にぐつとフォーカスする瞬間があつたり、つい言葉にしたくなる瞬間があつて、モノの出し方、気づき方が、一人ひとり違います。世代によって、さらに言葉が生まれされ、若い人にとっては「発見」の連続です。こぼれおちいる話を拾って、「記憶」と「地域の歴史」の隙間を埋めていきたいですね。

2018年の成果は?

10組から60本集まりました。提供者の方と観るプライベート上映会を10回、鑑賞会は3回実施。昭和を知らない世代なので新鮮でした。

8ミリフィルムの魅力は?

鑑賞会では来場者の方が「ちょっと止めて」といきなり映像の本筋とは異なる、そこに写っている物にぐつとフォーカスする瞬間があつたり、つい言葉にしたくなる瞬間があつて、モノの出し方、気づき方が、一人ひとり違います。世代によって、さらに言葉が生まれられ、若い人にとっては「発見」の連続です。こぼれおちいる話を拾って、「記憶」と「地域の歴史」の隙間を埋めていきたいですね。

活動をとおしてみてきたこと

自分が知らない時代を人の語りから知っていく。それは、本を読んでることとはまた違う接点や深みをつくってくれます。誰かの見た過ごした風景の中にいま自分が生きていました。訳で、場所や時代に対する思いや見方もひとつのレイヤーではなく多層であることを実感しました。

専門が都市計画なので、場所をどう知っていくか、失われた風景との接点をいかに持つかといったリサーチの方法として面白いなと思っています。

実際にフィルムの映像に出てきた地域に出張して上映会をしたり、奉還町を拠点に岡山県外から来る人们にも見てもらえるようにしたり、活動のすそ野を広げたいです。

2019年の展開

実際にフィルムの映像に出てきた地域に出張して上映会をしたり、奉還町を拠点に岡山県外から来る人们にも見てもらえるようにしたり、活動のすそ野を広げたいです。

成田海波(なりた・みなみ)／nawateアーカイブ代表・「奉還町4丁目ラウンジ・カド」店長

1990年青森県生まれ。大学院在学中に岡山奉還町で空き家と人、人と人をつなぐNAWATE PROJECTの母体である合同会社を立ち上げ、ゲストハウス「とりいくぐる」の姉妹店である「奉還町四丁目ラウンジ・カド」を運営。並行して東京工業大学環境・社会理工学院博士課程に在籍し、岡山で都市と文化的活動の関係性について研究中。2018年よりNAWATE PROJECTの一貫として「nawateアーカイブ」を始動。

https://www.facebook.com/Nawateアーカイブ-2416515475059134/?modal=admin_todo_tour

資金調達はじめの一歩

上手に活動に取り入れることで、事業の成果を高めることができる資金調達手段のひとつ「助成金」。NPO活動をはじめ市民活動しているみなさまに岡山県内で社会投資を行う団体を紹介します。



教えて!
財団

助成団体	助成名	募集期間	分野	2019年度実績
(社)岡山県共同募金会	赤い羽根共同募金 「地域ささえあいプロジェクト」	4月中旬～6月末	福祉	10件 10,390,000円
	赤い羽根 ボランティア団体 ・NPO活動支援事業	10月1日～12月中旬		4件 530,000円
(公財)橋本財団	福祉助成	9月1日～10月31日	社会福祉	29件 27,828,350円
(公財)マルセンスポーツ・文化振興財団	マルセンスポーツ・文化振興財団活動助成	11月15日～翌年1月20日	スポーツ・文化芸能	20件 1,930,000円
(公財)福武教育文化振興財団	教育文化活動助成	12月1日～翌年1月31日	教育・文化芸術	134件 28,000,000円
(公社)岡山県文化連盟	文化パワーアップ・アクション助成	1月～2月頃	文化芸術	9件 1000,000円
(公財)みんなでつくる財団おかやま	割り勘で夢をかなえよう! 事業指定助成プログラム	5月頃、10月頃 年2回	テーマ自由	クラウドファンディング型の助成 (1事業規模50万円程度)
	みんつく冠基金事業	12月中旬～1月末頃	福祉、倉敷、基盤強化	4テーマ 2700,000円 (2019年度予算)
	ももたろう基金	随時	災害支援・復興	69件 31,138,000円 (2018年度実績)

他にも県市町村には、さまざまな事業に対して補助金や委託事業があります。

団体の活動にあった資金を調べてみましょう。



多田 伸志

TADA shinji

NPO法人 岡山マインド「こころ」／代表理事
一般社団法人お互いさま・まびラボ／

副代表理事

1960年広島県尾道市生まれ。長崎大学水産学部卒後、地方の卸売市場でマグロを解体していましたが、思うところがあり24時間全開放病棟の精神科病院まきび病院の相談員に転職。23年間精神医療の中で失敗を重ねながらも勤務。当事者が堂々と自らの「障害」を隠さず、自身の「病」のことを語り合いながら、仲間と共に「当たり前」の苦労をしながら地域で暮らすことを目的に2002年NPO法人岡山マインド「こころ」を当事者の仲間たちと設立。2011年には、補助金をもらわない地ビール醸造所と仲間で助け合って暮らすグループホームを立ち上げて、まちへの土着を目指す。

市真備町は泥水に沈みました。翌8月25日、「地ビールと音楽の夕べ」を企画し、被災後はじめて300人ものまちのみなさんが集まりました。被災したまちの人たちに鼓舞われたのは地ビール。その場をつくったのは、同じく被災した「こころ」の「病」をかかえた当事者たちです。

NPO法人岡山マインド「こころ」は8年前から「真備竹林麦酒醸造所」を立ち上げました。「病」を隠さずに地域で生きる。グループホームで暮らしながら、ビアホールで働く。お客さんはまちの連さんたち。瓶を洗つて返してくれる「美味しかった、ありがとうございました」、私たちはお金をいただいて「ありがとうございました」。ありがとうのやり取りが小さなまちの中に当たり前に出来上がっていました。やさしいまち…。

「早くビアホールを開けてーよ」まちの皆さんからの声。
「ゆっくり、ゆっくり、きっといまちになります」。

「地ビールと音楽の夕べ」を企画し、被災後はじめて300人ものまちのみなさんが集まりました。被災したまちの人たちに鼓舞われたのは地ビール。その場をつくったのは、同じく被災した「こころ」の「病」をかかえた当事者たちです。



地域を結んだ地ビール



Editor's Column

■年金など当てにせず、自分の甲斐性で老後生活を送りたい。国にしてもらうことを期待せず、自分が国に貢献したいと若い頃思っていた私も、本年より前期高齢者に突入しました。かつての志とは裏腹に、年金事務所からの年金受給連絡を熟読し、岡山市シルバーカードの無料施設を確認しました。多少の罪滅ぼしに10連休中は、県内各所を観光し、普段なら使わないお金を地元に還元した次第です、貢献にはほど遠いですが。■帰省した長男はちょうど半分の年齢ですが、一体何歳から年金がどれだけ受け取れるのか、何歳まで生きるのか、それまで仕事はきちんとあり蓄財出来るのか等と思わず考えてしまいます。私が息子と同年齢の時は、バブル景気に踊っていた時期で本当に隔世の感があります。現在の人口減少の「縮む社会」で世界の中で生き残っていくためには、本当に試練の時だと感じます。■しかし10連休、改元フィーバーが終った今、あまり悲観的になっても何も解決しません。時代の変化に力強く対応できる力を持つ人材を育てる、教育文化の力、それを支える人々の活動に期待したいと思います。今回より、FUEKI本誌にQRコードをつけました。さらに豊富な情報量を持つ財団ホームページをぜひご覧ください。(O)



人づくり、地域づくりを応援します
公益財団法人 福武教育文化振興財団

〒700-0806 岡山市北区広瀬町1番5号
株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL:<http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL:eczaidan@fukutake.or.jp



機関誌 不易 FUEKI vol.69 2019.5.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作:株式会社吉備人

デザイン・イラスト:タケシマレイコ

印刷:株式会社三門印刷所